

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 1 日現在

機関番号：32616

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370611

研究課題名(和文)インプットを重視した処理指導の日本語教育現場への応用に関する研究

研究課題名(英文)Applying Processing Instructions Theory in Japanese classes

研究代表者

中上 亜樹 (Nakaue, Aki)

国土館大学・21世紀アジア学部・准教授

研究者番号：90581322

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、第二言語習得理論に基づく「処理指導」というインプット中心の指導法を取り上げ、この指導法を教育現場に効果的に取り入れる方法について検討するために調査を行った。その結果、文法説明の後に、話す練習をしてから聞く練習をする場合でも、聞く練習を先にしてから、話す練習をする場合でも、どちらも同程度の指導の効果があることが分かった。「処理指導」の理論では、文法説明の後に、まず聞く練習をすることが効果があるとされているが、今回の調査ではそのような傾向は見られなかった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to examine means of integrating Processing Instruction Theory into Japanese teaching. The following two procedures were conducted and compared in this research. 1) Grammar input followed by speaking practice then listening practice. 2) Grammar input followed by listening practice then speaking practice. The results revealed that both conditions had the same degree of effectiveness of instruction on students. According to Processing Instruction Theory, conducting a listening exercise straight after the Grammar input should be more effective, however, this wasn't supported with this study.

研究分野：日本語教育

キーワード：処理指導 指導の効果 インプット中心

1. 研究開始当初の背景

現在の初級日本語教育現場では、一般的に、話したり書いたりするアウトプット中心の練習が重視され、多くの時間が割かれている。その一方で、第二言語習得理論に基づく「処理指導」というインプット中心の指導法があり、学習者の発達システムに働きかける指導方法として、日本語教育においてもその有効性が注目されている(Fukuda 2009 , 中上 2012 など)。

しかし、日本語学習における処理指導の効果を検証した研究は未だ限られおり、処理指導を教育現場に取り入れるためには、以下のような課題が残されている。

処理指導の検証研究から教室現場に応用する方法が明確ではない
教師が実際に応用できる形で公開する必要がある

実際の授業ではインプットのみでの処理指導を単独で行うことは考えにくく、従来のアウトプット中心の指導に、どのように処理指導を組み込んでいくかを提示することが重要である。

また、実際の指導で使うためには、処理指導の効果が期待できる項目をリストアップし、練習方法について示した教師用説明書、教材例などの提示が必要である。

本研究では、これらの課題を克服し、処理指導が教育現場で応用可能となるような方法を実証的に検証した上で、効果的な指導法や教材を具体的に提示していくために、調査・研究を行った。

2. 研究の目的

第二言語習得研究の成果を基に考えられ、外国語習得に効果があると言われている、インプット理解(聞き/読み 意味を理解する)活動を中心とした「処理指導」という指導法がある。本研究では、現在、教育現場で一般的に行われているアウトプット練習中心の指導に、どのように処理指導のインプット練習を組み込めば効果的かという点について検証し、新たな教材を作成・公開することを目的として調査・研究を行った。

本研究は、研究の成果をいかに効果的に教育現場に取り入れられるかを検証する点が特徴としてあげられる。教育現場では、「研究と実践は違う」という言葉を教師の口からきくことがある。そのため、処理指導に効果があることを実証するだけにとどまらず、実際に現場で使える形にまで具体的にしたいうえで、広く結果や教材を公表することを目指している。

3. 研究の方法

本研究では、大きく分けて以下の3つの観点から研究を行った。

指導対象項目と効果測定法の検討

処理指導の効果が期待できる項目を学習者コーパスの分析によりリストアップするとともに、指導の効果を測定する方法について検討した。本調査では、特に、先行研究で行われている指導の効果測定方法に加えて、口頭運用能力についても測定したいと考えたため、方法の検討が必要であった。

検討の結果、今回の調査で指導対象とした項目は、日本語能力が上がっても比較的習得が難しく、コーパスの中でも誤用が多くみられた受身であった。また、受身の用法の中でも、「私は先生に怒られました」というような自動詞の受身文と、「私は田中さんに足を踏まれました」というような間接受身文の2つを対象とすることにした。また、口頭運用能力の測定については、先行研究を参考にし、4コマ漫画のストーリーテリングを行うこととした。

処理指導の導入方法と指導の効果との関係を明らかにする

アウトプット中心の指導の中に、どのタイミングで処理指導のインプット練習を行うのが効果的かを明らかにする。具体的には、一般的に授業では、「文法説明 アウトプット活動 インプット活動(内容確認のためのリスニング)」という順で授業が行われているが、このインプット活動を処理指導の手法を使った活動に置き換えた場合、「文法説明 アウトプット インプット」という従来型の指導の手順が効果的なのか、それとも、「文法説明 インプット アウトプット」という順序のほうがよいのかについて検討を行う。

実際の教室場面で調査を行うと、指導以外の要因が結果に影響を与える可能性があるため、調査は1人ずつパソコンを用いて行うこととし、文法説明、聞く練習(以下、理解活動)、話す練習(以下、産出活動)はすべて事前にプログラムを作成し、同じ内容の指導が行えるようにした。

文法説明については、インターネットで日本語の授業を行っている現役の日本語教師に依頼して、受身の授業を行ってもらいその様子を録画した。理解活動については、処理指導の理論のとおり、機械活動と情意活動の2種類の活動を行った。機械活動は、図1のように、音声を聞き、その後に出る2枚の絵の中で、同じ内容を表している絵をできるだけ速く選ぶという練習を行い、反応に対するフィードバックも与えられた。

情意活動は、「あなたは今までお父さんに怒られたことがありますか。何をして怒られましたか」というような、受身を使って、学習者自身のことを聞く質問が行われ、それに対して学習者が発話をして答え、調査者と少し会話のやり取りをするという活動を行った。話す際には、受身を使用して答えさせる

ことは意図せず、質問内容を理解して、学習者が自分自身のことを話すという内容に重点が置かれる活動であった。

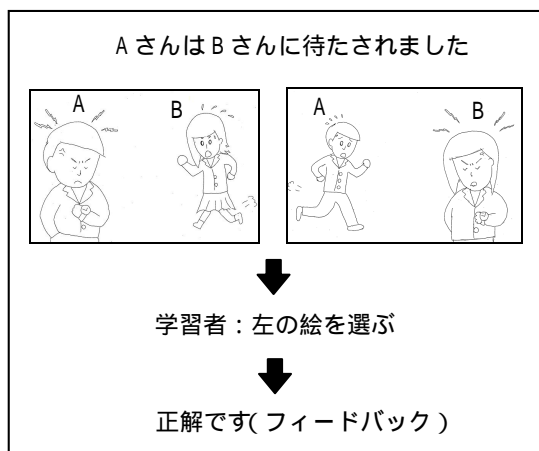


図1 理解活動の方法(機械活動)

産出活動については、理解活動と同様に、2種類あり、それぞれ機械ドリルと少し自由度のある会話練習を行った。機械ドリルは、図2のように絵を見て、指定された人物の視点で口頭で文を完成させる練習であった。産出後は、正答が文字とともに流れ、リピートするように音声で指示された。

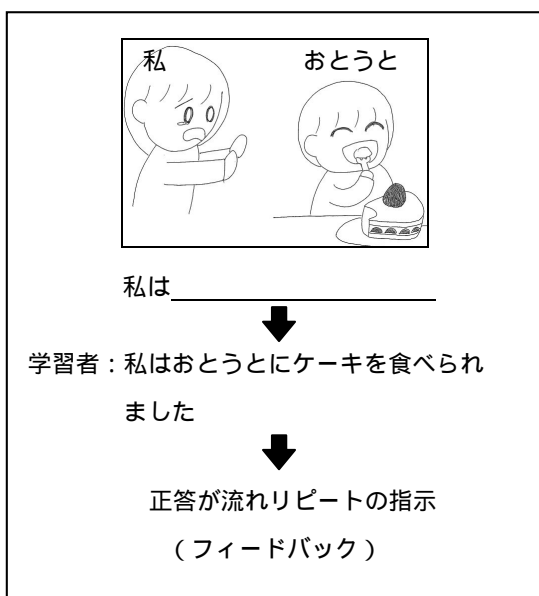


図2 産出活動の方法(機械ドリル)

会話練習は、モデル会話を参考に、絵を見て絵の内容にあった会話をする練習であり、調査者が会話相手として練習を行った。

受身の指導が行われた時間は、文法説明15分、理解活動、産出活動がそれぞれ20分程度ずつで、全部で約1時間程度であった。

また、本研究では、指導の効果を測定する必要があったため、パソコンを使った受身の指導の前後に効果測定のためのテストを行

った。テストの内容は、聞こえてくる音声と、その直後に出る絵の内容が同じか違うかを判断する音声と絵のマッチング問題と、4コマ漫画でのストーリーテリングであった。マッチング問題は、全部で72問あり、そのうちディストラクターが24問であった。ストーリーテリングは、川崎(2007)の受身を引き出すための4コマ漫画と同様のものを使用した。

今回の調査では、文法説明が終了した後の練習の段階で、どのように処理指導の活動を導入するのがよいかという観点で、理解活動と産出活動の順序を入れ替え、以下のA、Bのような練習の順序の異なる指導をそれぞれ14名ずつ、計28名に行い、その効果を比較した。分析の際に、Aグループの学習者のうちの3名が事前テストとして行ったマッチングテストで満点を取っていたため、分析の対象から外し、最終的に、Aグループの学習者11名、Bグループの学習者14名が分析の対象となった。

<学習者のグループ>

A: 文法説明 理解活動 産出活動
B: 文法説明 産出活動 理解活動

指導前に行った両グループのマッチングテストの平均点について t 検定を行った結果、両グループ間に有意差は見られなかった ($t(23)=0.56, n.s.$)。このことから、両グループの指導前の受身に関する知識は、同等のレベルであったと仮定できる。

教材に対する日本語教師からのコメントを収集

本調査は、研究の成果を、実際に現場で使える形で公開することを目指しているため、調査で使用した教材を現役の日本語教師複数名に見てもらい、授業で使用する場合の改善点などについて、意見を収集した。

4. 研究成果

文法説明を受け、意味を理解した後、まず理解を定着させるために、理解活動を行った場合(Aグループ)、または、すぐに口頭での産出をさせる産出活動を行った場合(Bグループ)を比較し、指導の順序が異なる2つのグループ間で効果に違いが出るかどうかについて分析を行った。その結果、どちらも練習自体に効果はあるが ($F(1, 23)=8.96, p<.01$)、2つのグループ間で指導の効果に違いがないことが明らかになった ($F(1, 23)=0.01, n.s.$)。つまり、文法説明を行った後に、理解活動や産出活動を行うことで、受身の成績は上がるが、どちらを先に行っても効果に違いはなく、授業の中で教師が自由に選択して行うことが可能だということが分かった。

処理指導の提唱者である VanPat ten の一連

の研究の中で、「インプット インテイク 発達システム アウトプット」と進む第二言語習得の認知プロセスにおいて、理解活動の部分をしっかり行い、インプットからインテイクへのプロセスを強化することで間接的に発達システムに影響を与え習得が速まると述べられている (VanPatten & Cadierno 1993 他)。そのため、発達システムに直接影響を与えることのないアウトプット練習を繰り返す従来型の指導では、口頭運用能力の自動化に影響を与えるだけで習得に影響を与えないと言われている。このことから考えると、実際の授業では、文法説明で意味を学んだ後、しっかりと意味を理解し、インテイクに結び付けるためにまず理解活動を行ったほうが効果が高くなると予想されるが、本調査の結果はそうではなかった。処理指導で行われる理解活動は、多くの先行研究でその効果が認められているが、これまで、実際の指導の中で具体的にどのように取り入れるかという点から研究が行われたことがなかった。本研究の結果から、理論に沿った結果は出なかったが、学習者や授業形態などに合わせて、教師が比較的自由に選択できると明らかになったことは、教育現場への導入の実現に向けて意味のある第一歩であったと考える。

また、作成した教材について、現役の日本語教師から得たコメントとしては、第二言語習得論に関する知識があまりない場合は、教材を見ただけでは何を狙った練習なのかが分かりにくく、教室でどう使うのが効果的なのかが判断しにくいというコメントが多くあった。そのため、処理指導の理論や教材の狙いなどを簡単に説明した使用書のようなものを作成した。また、授業での教材の使用例、特に、情意活動の方法について例を示しながら授業内で使用する方法について説明する文書を作成した。

本調査は、教育現場で、「研究と実践は違う」という言葉を教師の口からきくことがあるため、研究の成果をいかに効果的に教育現場に取り入れられるかを検証するという目的で行われた。今回対象としたのは、受身という1つの項目であったが、今後は、もっと多くの項目に関して、処理指導の理論を用いた理解活動を実践できる教材を作成し、現場で使用できる形で広く公開していきたいと考えている。

<引用文献>

Fukuda, M. (2009) *The effect of processing instruction and meaning-based output instruction on the acquisition of Japanese honorific expressions*. Unpublished doctoral dissertation, Purdue University, West Lafayette, Indiana.

VanPatten, B., & Cadierno, T. (1993a) Explicit instruction and input processing. *Studies in Second Language Acquisition*, 15, 225-243.

川崎(森)千枝見(2007)「日本語学習者の言語形式の選択 - ストーリーテリングによる「受身・使役」と競合する形式に関する一考察 - 」『*広島大学日本語教育研究*』第17号, pp. 19-25, 広島大学大学院教育学研究科日本語教育学講座。

中上亜樹(2012)「理解中心の指導法「処理指導」と産出中心の指導との比較研究 - 形容詞の比較の指導を通して - 」『*日本語教育*』第151号, pp. 48-62, 日本語教育学会。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計1件)

中上亜樹, 文理解における日本語学習者のストラテジー使用に関する研究 - インプット処理ストラテジーに着目して -, 21世紀アジア学研究, 査読無, 13巻, 2015, 75-87

[学会発表](計2件)

中上亜樹, 教室内で行われているインターアクション - 学習者の気づきに注目して -, シンポジウム 授業を見て考える - 地域の日本語教室をテーマに -, 2015年9月2日, 学習院大学(東京都豊島区)

中上亜樹, 日本語学習者のインプット処理ストラテジーに関する研究 - 処理指導への応用を目指して -, 日本語教育国際研究大会2014, 2014年7月12日, シドニー(オーストラリア)

6. 研究組織

(1)研究代表者

中上 亜樹 (Nakaue, Aki)
国士舘大学・21世紀アジア学部・准教授
研究者番号: 90581322

(2)研究分担者

桜木 ともみ (Sakuragi, Tomomi)
国際基督教大学・教養学部・講師
研究者番号: 80643808

松岡 知津子 (Matsuoka, Chizuko)
三重大学・地域人材教育開発機構・准教授
研究者番号: 60571495